

カナダ日系人コミュニティの「模索期」と“HAPA”の登場

—分類（分化）と枠組みを超える—

照井悦幸

カナダの日系人コミュニティが、存在のかたちを模索し始めていると論じられて30年近くが経ようとしている。この間、「新移民」とも名付けられた60年代以降の移住者の数は増加し、その移住のスタイルや移住者の考え方はさらに多様化した。一方、二世や三世と親世代とのギャップが議論された戦前の日本人移民とその子孫たちは、今日ではおおよそ四から五世代の人たちをめぐるものとなっている。30年前の環境とは異なった社会に育って、新たな価値観や見方を備えた世代である。そして2011年、バンクーバーでは日本人を先祖に持つ混血の若者たちが中心になって“Hapa-Paloza”（ハパ・パローザ）が開催された。アジア系の混血（“Mixed Race”）のアイデンティティをたたえあい、芸術を通じてその誇りを表現しようとするものである。カナダにおける日本人女性の結婚率（他のエスニック集団に属する人びとと結婚する割合）は高い。ハパは、日系と言う枠組みとは離れて、ひとつのコミュニティを作り上げていくのだろうか。あるいはまた、日系コミュニティは、日系と繋がりをもっているはずのハパたちとどんな関係を築くことができるのだろうか。今日では、ハパの枠組みはさらに拡大し、すべての混血を包括して繋がっていきという認識も示されている。分散化と多様化によって、日本人のコミュニティが模索期を迎えたと論じられたのは、1988年、コミュニティが大きな歴史を刻んだりドレス運動（賠償問題）の決着以後の状況下であった。本稿では、先行研究に基づいて、リドレス以降90年代後半までの日系人コミュニティの変容を概観し、そのかわりの範囲で、ひとを分類するどの枠組み

にも入りきれなかった、ハパについて述べていく。以下の文章は、山田（2000）が日系カナダ人社会の変化を三世代にわたって記述した論考の締めくくりで引用されたものである。1991年5月に「ニューカナディアン」紙上に掲載されたオードリー・コバヤシ博士⁽¹⁾のこの文は、本稿との関連においても全く適切であり、30年経った今日においても重要な指摘ではないだろうか。

日系カナダ人は、単一の文化・集団ではなく、変化し続けるものなのです。現在すでに、90%以上が、異人種間結婚をしており、これが日系カナダ人の行く末です。だから、「日本人」の「血」だとか「純粋な日本文化」だとかに対する偏見を捨てることが必要で、将来、日系カナダ人としてのアイデンティティを持ちたいのなら、伝統文化を築くより、社会のネットワークを広げることが大切で、そこには排他的でなく「皆を含めて」いく姿勢が重要なのです。

（山田、2000、P320）

I. 日系コミュニティの「模索期」：分散化

日系カナダ人によってカナダ全国規模で繰り広げられたリドレス（Redress）運動は、第2次世界大戦時におけるカナダ政府による日系人強制収容に対する補償（Redress）を求める運動（リドレス運動）である。1988年、日系人コミュニティの勝利で一応の決着を見たが、これは単に日系人が補償を勝ち取ったという意味以上に重みがある。日系コミュニティの勝利は、少数集団に対して不当な扱いをし、人権を踏み

にじった事実を公式にそのホスト政府に認めさせたことにおいて、カナダ政府と他の少数集団にとっても歴史的な出来事だとされるものである。だが、日系コミュニティは、この運動の高揚が収まるなかでひとつの過渡期を迎えたとみられるようになる。椿（1998）は、「・・・大きな目標を失った日系社会は分散化・多様化が進行する中で、コミュニティの将来を模索しつつある。」（1998、P153）と述べ、リドレス解決以降を日系コミュニティの「模索期」と位置づけている。

日系人の「分散化」は、カナダ政府がとった政策であった。強制収容を解放するにあたり、カナダ政府は日系人の90%が居住していたBC州への帰還を拒んだ。BC州から他地域へ移動することを求めたのである。この再定住政策（拡散政策）によって、日系人は拡散されていった。飯野（1997）が掲載する資料によれば、カナダ東部のケベック州（モントリオール）では、1941年時にわずか48人の日系人が、戦後1951年に1,137人に、オンタリオ州では234人から8,581人に急増している（1997、P131）。BC州への帰還制限は1949年になって撤廃されたが、そのほとんどの人たちが東部地域に留まった（飯野、1997）。政府によるこの政策が日系人を分散させたが、同時に、戦争時の苦い経験を経て、日系人自身もまた集団化することを避け、目立たないように生活しようとしてきたことが伝えられている。

このように、日系コミュニティの維持や発展に対しては戦後すぐに困難が振りかかっていたが、もっと複雑な問題として日系コミュニティが模索を強いられてきたのは、コミュニティ内部の「多様化」である。以下ではこの問題について、まずリドレス前後から今日に至るまでの日系人コミュニティについて記述する。

II. 日系人の分類化（多様化）と団結

リドレス運動が活発化した契機は、1977年に記念事業として企画された「日系百年祭」とされる（飯野、1997）。戦時にカナダ政府がとった日系人に対する措置に補償を要求する動き

は、1946年には始まっていたという。しかし、その当時は損害調査も行われないうちに終えてしまう。この事情を飯野は「戦時中の経験から自分の出自を恥と思い、その経験の不名誉さから逃れるための最善の方法は、ただ、目立たず、カナダ社会に同化し、1949年に獲得したばかりの地位を活用することだと考えたからであろう」（1997、P153）と論じている。上述したコミュニティの分散を進んで受け入れていった背景も、このような心理に基づくものである。

こうした状況が、百年祭というイベントを機に一転することになる。日系人が全国的なネットワークをつくり、団結する。辻（1990）が行ったインタビューのなかに、日系人であることを失いかけたひとりの男が、コミュニティ運動に引き込まれて行く、その心情を明確に描く語りが記録されている。このインタビューには、コミュニティ内部で分類される日系人の枠組みが浮き彫りにされている。以下に、辻のインタビューを一部抜粋しながら考察を加える。

ぼくがカナダ人になってゆくその間にも、ぼくはずっと日系社会とはあまり関係なかったんです。・・・1977年でしたか、日系史百年祭というのが大々的にあって、それまでもぐっていた他の日系人とともにぼくもそれに参加したのがきっかけで、いわゆる少数民族としての、日系としての、自覚というものを持つようになったという気がします。

（辻、1990、P294）

インタビューに答えている渡辺繁氏は、1935年にカナダで生まれた二世であるが、5歳のときに教育のため日本にわたる。そして、戦後10年を経てカナダに戻った。渡辺氏のコメントから、百年祭というイベントが日系人としての自覚を促したことがわかるが、同時にコミュニティ内部で分類される日系人についても示唆を与える。

米国あるいはカナダで生まれ、教育などを一時的に日本で受けたあと、再び北米に戻った日

系人を指して「帰米 (kibei)」あるいは「帰加」とよんだ。日系人グループの中でのこの分類は、戦前からあったことだといわれる。辻 (1990) は、わずか5歳でカナダを離れ、成人後に戻った渡辺氏を「帰加」とよぶのはためらうとして「彼自身もそういうためらいをずっと感じながら生きてきたのだと思っています」(P280)と述べている。一方、1960年以降に移民してきたものは「新移民」あるいは「新移住者」と名づけられ、戦前の移民者とは区別される。一世、二世、三世と呼ばれるのは、戦前の日本人移民とその子孫たちを指すものである。上述したように渡辺氏は、戦前カナダで二世として生まれたが5歳でカナダを離れた。「戦後日本からカナダへと渡った渡辺さんはしかし、自分のことを新移民とも一世とも二世とも見なすことができません」と辻は記述する (1990、P279)。そして渡辺氏は以下のように述べる。

ぼくは宙ぶらりんなんですよ。一世とも二世とも話が通じない。孤独でした。しかし、日本へ帰るという気もない。もうこうなったら、行くところまで行かなきゃ仕方がないというような感じです。

(辻、1990、P291)

そういうなかで、渡辺氏は「カナダ人になってゆく」のである。辻の記述には、渡辺氏が英国系の金持ちの家でハウスボーイとして働き、やめる時には「惜しまれるほどになった」ことが記されている。しかしそれは、「宙ぶらりん」という思いを抱いた渡辺さんが、「行くところまで行かなきゃ仕方がない」というような感じで行き着いた所であった。一世とも二世とも話が通じない、帰加グループにも馴染めない。渡辺氏は日系コミュニティの内部にあって孤独を感じ、居場所を失っていたことを語っている。「ぼくがカナダ人になっていく・・・」と表現する渡辺氏の半生は、日系人のアイデンティティ⁽²⁾の問題を物語る。すなわち「ぼくが日本人でなくなっていく・・・」ひとつのケースとして捉えることができる。日系コミュニティは、世代間をは

じめ出身地 (県人会) など、コミュニティ内部で日系人を分類する。そして渡辺氏のケースは、どの枠組みにも入りきれなかった。この場合、どの枠組みに入らないとは、そこに存在する自己を失ってしまうことであった。

〈日系人の世代差〉

日系人のアイデンティティについては、リドレス運動を通じて明確となったその世代差が指摘されている。佐藤 (1997) は、「一世は一貫して『日本人』というアイデンティティを持ち続けた」(P97) 一方で、差別的な扱いを受けた戦争体験を通じて、その子女には、カナダ社会との同化を奨励したという。二世については、日本人であることを家庭環境から自覚させられる自己と、ホスト社会で社会化された自己とが、相反する社会的圧力のなかで心理的葛藤を生むといった普遍的な問題を抱えていたとする。そして戦後、公的差別が減少されるにしたがって「それまで抱きつづけていた祖国への憧憬が反動となって『カナダ人』としてのアイデンティティを強く持つようになった」と指摘される (1997、P97)。一世、二世は、「戦時中の傷跡はどうにも癒されるものでない」、あるいは「過去を引きずり出して事を荒立てるような真似はやめたほうがよい」として、リドレス運動には消極的であったという (佐藤、1997、P98)。

リドレス運動を積極的に押し進めたのは三世であった。佐藤 (1997) は、三世は「『日系人』というエスニシティ⁽³⁾の影響をそれほど受けずに育ち、それ故『カナダ人』としての国家に対するアイデンティティを持ちつつも、好奇心やプライドから自分たちのルーツへの関心を高めるようになった」としている。そして、こうした世代差について「・・・戦争を経験した者としていない者とのエスニック・アイデンティティのギャップ、また、それぞれの日本的・カナダ的価値観が象徴されている」(1997、P98)と論じている。三世が活躍する60年から70年代は、エスニック運動が世界的に活発化した時代でもあった。この動きにも刺激されながら、人権問題というカナダ国家の問題として、

三世らはリドレス運動を先導した。佐藤はこうした内部で分化されていた日系コミュニティとリドレスの時代を以下のようにまとめている。

・・・リドレス運動に対する姿勢は各世代で異なるが、ひとつの問題に取り組むことによって彼らの団結は高まっていった。この時期、エスニック・アイデンティティの認識に世代差を含みつつも、コミュニティ全体に「日系人」というエスニック・アイデンティティが確立されていったと言えるのではないだろうか。

(1997、P98)

日系百年祭のイベントからリドレス運動の活発化への過程は、上述した渡辺氏だけではなく多くの日系人に「日系としての、自覚」を促すことになる。目立つことを避け、分散された「それまでもぐっていた他の日系人とともに」、コミュニティ運動への参画が実現されたのであった。他のエスニック・コミュニティと比較して少数であるうえに、分散化されて居住していた集団。この日系コミュニティが一気に強力な集団となったのは、メンバーの意識を統合させる共通なゴールが明確に示されたことに困ったことをあらためて確認しておきたい。加えて、ここでは触れないが、そうした団結を可能にさせたのには、ゴールへ向けて具体的な道筋を提示するリーダーシップの存在があったことは言うまでもない。

Ⅲ. ポストリドレスの模索とミドルクラス移民

日系コミュニティが模索期を迎えたとされるのは、大きな目標に向かってきたコミュニティの動きが終了した後であった。リドレス解決以降の日系コミュニティが模索期とされた最大の理由は、日本人移住者の多様化による。新移民者の多様性は、もはやコミュニティの枠組みに収まらないのではないかと、あるいは彼らの視野には既存のコミュニティが入らないのではないかとといった問いである。そして90年代後半までには、このような新移民と戦前からの日本

人移民とその子孫（二世、三世を指す）との間に存在する壁が危惧された。両者は、はじめから違いを意識し、お互いに関心を示さず、融合しようとしないうという見方がなされた（新保、1980）。アンケート調査を実施した佐藤(1997)は、日系人と新移民がお互いに「同一視していない」と論じ、「日系社会は分散もしくは弱体化・・・」して来ていると指摘している（P99）。

新移民とは、「戦後、特に移民法改正の1967年以降に、日本からカナダへ移住した人びとを指す呼称」（山田、2001、P145）と定義される。カナダでは、中国人に対する人頭税法を始めとして、アジア系移民者に対して人種をもとに規制を定める法律が存在していたが、そうした「人種規制」は、1967年に完全撤廃された。以後、カナダの移民政策は経済発展に主眼を置くことに転じ、職業技術や経験、能力などについて、ポイントシステムで移民者を招き入れている。このようなシステムで移住してきた1960年代後半以降の新移民者の特色について、山田は以下のようにまとめている。

・・・概して教育程度が高く、都市生活者といった点が挙げられ、さらに彼らが日本において従事した職業も幅広い。・・・出版社勤務、柔道インストラクター、大学教員、大工、TV修理技術者、旅行業、美容師、レストラン経営、その他と多種多様にわたっている。

(2001、P126-P127)

これらの移民者は、それぞれの技術や能力で「個人でやっていくということがその前提にある」（2001、P143）、個人移民である点が重要な特色として指摘される。英語圏における日系コミュニティの形成を担っていた移民者たちの変遷を概観すれば、政府斡旋による組織的に移民したハワイでの官約移民⁴⁾者らが1960年代まで主流を成し、以降70年代から80年代では企業の海外進出に伴う駐在員とその家族へと変化していった。その後80年以降に、駐在員か

らそのまま留まったもの、留学生や長期旅行者などの増加や国際結婚などによる移住者が重なり合って、移民者は多様で新たな特色を帯びることになる(松谷、2014)。

山田の論考から10年経って、新移民者の特色は、グローバル化の影響でさらに変化する。松谷(2014)は、現地採用の移住者を考察する中で、個人化が進み、大衆化した移民を称する「ミドルクラス移民」という語を紹介する。移住先の企業と直接雇用契約を結ぶ彼らは、高熟練移民者(エリート)に対して「・・・中間レベルの技術者や事務職員といった人々をも内包させ」(P58)「旅行、退職移住、国際結婚といった労働者に限定されない」(P56)多様な移民者を表現するものとする。このような移住者は移民動機に経済的な要素は低く、滞在資格も比較的容易とされ「従来の移民と比べて経済、政治、制度的観点で大きな問題をかかえにくい・・・」と考えられるものである(P59)。

コバヤシ(2006)は、トロントにおいて移住してきた時期が異なる2つの新移住者女性グループを調査したが、この2団体が比較されたとき、ミドルクラス移民の特色が露わにされてくる。コバヤシは、1960年代から70年代の前半に移住してきた、平均年齢48歳の女性新移住者のグループ24名と、2000年代に入る前後にカナダに来た、平均年齢33歳の女性新移住者グループを研究対象にした。早い時期に移住してきた前者の女性たちは「学歴が高く、専門職志向が極めて高いことが特徴になっている」(2006、P316)。また「当初、日本にいる家族の援助を受けて、留学生としてカナダに入国した」(P316)とし、日本でも比較的裕福な家庭の出身者ではないかとしている。一方、比較的最近になってやって来た女性グループの会員は「学歴も低く、低賃金で熟練度の低いパートの職種に就いている」、「あまり裕福な生活をしていないと言う」としている。また会員の半分は、ワーキング・ホリデーのビザで入国したという(P317)。2000年代に入ってきた後者のグループは、松谷のいうミドルクラス移民の典型的なものではないか。コバヤシが研究対象とした両

グループは、日系人以外の男性と結婚した女性の集まりである。1960年代から70年代の前半に移住してきたグループの女性たちが、出張や留学で日本にやってきた非日本人男性と結婚したのち移住してきたのに対し、ワーキング・ホリデーのビザで入国してきた後者の若い世代は、カナダに来て出会った男性と結婚している。このような、結婚形態の違いも指摘されている(2006、P322)。

日系コミュニティは動き続けているのであり、変化に対応しようとするならばその模索は続いていく。日本からの移住者は、女性が全体の3分の2を占める(コバヤシ、2006)。そうしたなか、コバヤシがトロントで接触したようなグループ、非日本人と結婚した女性で形成されるコミュニティが形成されてくるのも当然のながれであろう。個人化したといわれながらも、新しく移住していく人々は、様々なケースでその社会での経験に富んだ日系の人々に助けられることは多い。コバヤシの論考では、紹介した2つのグループに加えて、メンバーの大半が新移住者男性(日本人)と結婚した女性グループにもインタビューしている。このグループのメンバーたちからは、英語能力にも不安を感じ「自信が持てずに、文化的にも社会的にも孤立している」という話を聞き取っている(2006、P328)。下茂(2010)は、日系人コミュニティが、新しい移住者の適応をバックアップする機能を担うことも指摘している。

ここまで、ポストリドレスにおける日系コミュニティ模索の主因を多様化する新移住者に絞って概観してきた。最後に、コミュニティ内部の多様化に関連して、筆者が2014年から2015年にかけて滞在したビクトリア市の日系コミュニティについて簡単に触れておきたい。

IV. B.C州ビクトリア市の日系コミュニティ (2014-2015)

B.C州の州都、ビクトリアにも複数の日系コミュニティが存在するが、ビクトリア日本人友好協会(The Victoria Japanese Friendship Society)とビクトリア日系文化協会(The Victo-

ria Nikkei Cultural Society) との関係には、日系人コミュニティの多様性が反映されている。両者の違いについて、VNCS のホームページでは以下のような説明がなされている。

ビクトリア日本友好協会 (VJFS) は日本語で運営され日本語のニュースレターを発行していますが、ビクトリア日系文化協会 (VNCS) は英語で運営され、英語のニュースレターを発行しています。ただ、両会の違いは使用言語の違いだけではなく、会の運営の仕方が前者は“日本的”で、後者は“カナダ的”といっただけでしょう。
(<http://www.vnsc.ca/wordpress/>)

日系人コミュニティという枠組みの中で、“日本的”であるグループと“カナダ的”なグループとが分化されているということである。ホームページはさらにカナダ的であることを以下のように説明する。

カナダで生まれ育った移民第二世代・第三世代の方々は英語を母語として育ち、カナダ的な学校教育システムの中で学びますので、家庭でご両親から日本文化を受け継いでいるとしても、物事の考え方や感じ方、行動の仕方などはどうしても“カナダ的”になります。
(<http://www.vnsc.ca/wordpress/>)

VNCS は「二世・三世が中心的メンバーとなる日系組織」である。一方 VJFS は新移民者の組織ということになる。しかし、両組織は協力して日本的な行事を合同開催している。ホームページでは「そのような違いを乗り越えて」と述べられている。こうしたことも、日系コミュニティの模索の痕跡といえる。現実問題として、この協力関係は両組織に跨って活動できる「仲介者 (mediator)」的な存在が不可欠であろう。新移民者の組織とはいえ、VJFS の主要メンバーは日本から移住して 30 年を超える人たちである。そして VJFS は、2015 年に創立 20 周

年 (1995 年創設) を迎えた。一方ビクトリア日系文化協会 (VNCS) も、その 1 年前、2014 年で 20 周年を数えている。それぞれに異なった役割を果たしながらも、良好な協力関係にあると言っているのではないかと。両組織で理事を務める岡田知子氏は、VJFS と VNCS の関係について以下のように述べている。

最近 VJFS の高齢化で、運営に関し活力が見られず世代交代がうまくひきつがれずにいます。私は日系協会 (VNCS) の傘下に入って、1 つの日本語をしゃべるクラブとして存続していったらと思っています。バンクーバーではかなり前からそういう形になっています。

今後のビクトリアの日系コミュニティについて、岡田氏は以下のようなコメントを残した。

ビクトリアでは、(日系のコミュニティとして) 第 3 の位置にいるのが、多くの hapa の子供をかかえる Victoria Heritage Language School⁵⁾ です。この若い家族の行方がどう繋がっていくのでしょうか？

Hapa (ハパ) は、“Half” を意味するハワイ語である。以下では、ハパについて記述していく。

V. どの枠組みにも入らなかったハパ

ハワイ語で“Half” を意味するハパ (Hapa) は元来、すべての混血者たちを指していた。しかし、白人とアジア系アメリカ人との混血を差別的に指す語として変化したという (オカムラ、2008)。日本人 (Hapa との区別として、英語では“Full Japanese” と表現されている) と日本人を祖先に持つハパが経験したことは、同じ北米大陸におけるアジア系排斥の歴史のなかにあっても異なっている。一例としてオカムラ (2008) は「異人種間婚姻禁止令 (miscegenation laws)」を挙げる。1600 年代に白人と黒人系アメリカ人との結婚を禁じる法として制定された

ものだが、1800年代に多くのアジア系移民者が流入した際に、アジア系と白人との婚姻も禁止した。この法令はその時代に生きたアジア系に対する強烈な迫害であるだけでなく、今に生きるハパにとっても、自己存在を揺るがす複雑な心理に陥れる負の歴史であろう。アメリカにおけるこの法令は、1964年まで存在している。

アメリカ政府による第2次世界大戦時の日系人強制収容は、ハパのアイデンティの問題を浮き彫りにした。スピッカード(2004)によれば、アメリカ本土の約700人のハパが、日系人とともに強制収容された。非日系人の配偶者の場合、収容所に行くかどうかはその者の選択に委ねられたが、その子供たちをどうするかという問題は複雑であった。子供たちとはハパに他ならない。結果的には、父親が日系の場合は強制収容され、白人の場合は自由な選択を与えられたという。

ハパであった自己の心情を、キャサリン・タマガワは自伝のなかで“citizen of nowhere”（「どこにも居場所のない住人」）と表現している。スピッカード(2004)はハパとしてのタマガワを以下のように紹介している。

・・・ She did not like being an American Asia. She opens her autobiography with the words, “The trouble with me is my ancestry. I really should not have born.” There follows a tale of tortured passage through her young life in American and Japan, undermined rather than supported by parents who had problems of their own. She was, by her own reckoning, a “citizen of nowhere” ・・・

(Spickard, 2004, P259)

アジア系アメリカンであることを好まなかった彼女は、自伝⁶⁾をこのように始めている。「自分の祖先のことがやっかいな問題。私なんか生まれるべきでなかった」そしてアメリカと日本で過ごした若い時代の苦悩が綴られる。自分たちのことで手いっ

ぱいだった両親には助けてもらったというよりも、むしろ傷つけられて。彼女は、自分を「どこにも居場所のない住人」とみなした。・・・

2000年に実施されたアメリカの人口統計調査が多くの人々に注目されたのは、自己の人種分類を申告する欄に「混血」という項目が設けられたからであった。アメリカ合衆国国勢調査局(U.S. CENSUS BUREAU: <http://www.census.gov/prod/2001pubs/>)によれば、2000年からの国勢調査において、自己の人種について申告する欄にはじめて“Two or more races”という項目を設けた。「2つないしはそれ以上の人種(“Two or more races”)という語は、6つの人種カテゴリーのひとつ以上を意味している」(The term “Two or more races” refers to people who chose more than one of the six race categories)と説明されている。6つの人種カテゴリーとは、「白人、黒人、アメリカ・インディアンあるいはアラスカ先住民、アジア系、ハワイ先住民あるいは太平洋諸島、その他」である。2000年までは、そのカテゴリーにおいてハパは存在しないものとされる。なお、この国勢調査においては、日系アメリカ人における3分の1が混血であることが明らかにされている。

〈ハパの組織化〉

ハパの存在を社会に認知させる活動は、1992年カリフォルニアにおける「日系ハパ(mixed race Japanese Americans)」学生たちの運動から始まっている。以下の内容は、ハパ・イシュー・フォーラム(Hapa Issues Forum)のホームページ(About HIF: <http://www.csun.edu/~smr>)の英文一部を和訳しての引用である。

カリフォルニア大学、パークレイ校で創立させた学生たちは、アメリカ人コミュニティと強い関係を持っていた。彼らの運動は、日系コミュニティの一部として活動されているものであった。1993年になってハパ・イ

シュー・フォーラムは非営利団体となり、94年にはその範囲をアジア系ハパに拡大した……。その後、支部は南カリフォルニア(1997)、UCアービング校(1999)、サンフランシスコ(2000)、スタンフォード(2001)、UCサンディエゴ(2001)、UCロサンゼルス(2001)と広がっていった。それぞれの支部は年次総会やアジア系アメリカンコミュニティ組織に対する多様性のためのトレーニング、複数の人種が混合した人々たちへのサポートプログラムを提供している。

アメリカの若い世代を中心に展開されたこのような啓蒙や教育活動に対して、カナダ、バンクーバーでは、2011年、やはり日本人を先祖に持つ混血の若者たちが中心になって“Hapa-Palooza”が組織化された。アジア系の混血(“Mixed Race”)のアイデンティティをたたえあい、芸術を通じてその誇りを表現しようとするものである。

グレーターバンクーバー日系市民協会(GVJCCA)が発行する日系カナダ人のコミュニティ誌“The Bulletin”の2015年9月号に、第5回のハパ・パローザ(Hapa Palooza)を企画したメンバー達のインタビュー記事が掲載されている。パローザは、ハワイ語で「お祭りさわぎ」を意味する。

記事によれば、ハパ・パローザの目的は「コミュニティを啓発し、混合した祖先の形質を受け継ぐ(=ハパ:mixed heritage)と自己をみなしているものたち同士の対話を通じて、ハパである者たちに関連する問題に対する公共の認識を促進させる。また、より重要な事として、ハパの若い世代のために肯定的なロールモデルとなること、話しあいができる場を作り出すこと」としている。

ハパ・パローザは芸術を通じてアジア系の混血である自分達を主張する。異質なものと接触や複数の世界を認識することが、知的に大きな刺激となって、新しいものが創造された多くの例を我々は知っている。彼らは、そうした自己の混合性を自らでたたえあうのであり、他者

の承認をもとめようとするものである。

〈日系コミュニティのなかのマイノリティー、ハパ〉

ハパの活動に道を開いたカリフォルニア大学バークレイ校の学生たちは、日系コミュニティと連携を持ち、その一部として活動していたという。その後、アジア系全体を視野に入れたアメリカ学生の活動は、日系コミュニティから遠ざかっていったように見える。アメリカ日系コミュニティの内部にある力関係を論じたステイーヴン(1998)の論考には、コミュニティの内部にあって、マイノリティー(小集団)と分類されたハパの存在が記述されている。

ステイーヴン(2006)は、1998年にアメリカで初めて開催された「アイデンティティ、コミュニティ、多様性」というテーマを探求する全米集会(連合の絆)の企画委員会でのやりとりを取り上げる。公開討論会の講演者を揃えるにあたって、企画委員会が作るリストには、コミュニティのなかの集団が明確に分類された。

コミュニティは三つのおもな集団に分けられると考えられた。中核には社会科学研究や博物館にみられる公的な日系アメリカがある。残り二つの主要な小集団は、追加された集団であり、コミュニティが「取り組まなければ」ならない「多様性」の源である。

(ステイーヴン、2006、P428)

二つの小集団とは「戦後移民である新一世と新二世」と「混血の人びと」である。プログラムには「多様な日系人種集団」と記述されていたという。ステイーヴンは講演者のなかに「ハパを入れなければならないほど人選に困っていると見られたくない」というリーダーや企画委員たちが思っていることに気づかされたという。そして、「ほかにテーマがないという絶望的な状況からハパの参加が求められているとみられて、参加者の中に入れられてもハパはおそらく立腹するだろう」と述べる企画委員の言動に、

両者の間にある種の緊張関係があるのは明確だとした。そして彼女は、以下のように日系コミュニティのなかの中核集団側を批判する。

現在の世代が多民族、多人種であり、後世においてはますますそうあるであろうが、それにもかかわらず、日系人の理想も将来像も明らかに単一人種的なままである。
(2006、P429)

そして、以下のように締めくくる。

外婚は差別から逃れる究極の手段であるが、同時にコミュニティの消滅にもなる。コミュニティ内で増加する混血による多人種的・多民族の特徴が、懸念、恐れ、怒りを生み出すのは不思議ではない。
(2006、P430)

〈結語〉

非日系人と結婚した新移住者女性グループを研究したコバヤシの論考のなかで、「女性たちがさまざまな形で繰り返し述べていたこと」を紹介している。それは「夫と子どもはカナダ人、自分は日本人」(2006、P327)という考えであった。異文化間結婚した女性の大きな問題は子どもとのコミュニケーションだということである。「・・・母子双方が自在に使えて、しかも精神的に安心できるような共通言語がなければ、子どもたちとの有意義な関係を築くことが不可能だということだった」(P326)。彼女たちの子どもとは、ハバに他ならない。顕著になった若い世代、ハバの結集から視線をずらしてみれば、疎外を感じている母親新移住グループがいることに気が付く。母親新移住グループにとっても、協力し合うコミュニティの存在が重要であることは言うまでもない。ステイヴンの論考に示されたとおり、日系コミュニティ内の2つの小集団であり、多様性の源である。

ハバ・パローザは、社会のなかで直面する共通な問題に対して、特に若い世代の力になることを目標に掲げていた。「社会のネットワーク

を広げることが大切で、そこには排他的でなく「皆を含めて」いく姿勢が重要なのです」というコバヤシのことばに従うならば、例えば母親新移住グループは、ハバのコミュニティをそのネットワークと連携することができないか。やがて、もう一方で疎外感を感じた非日系父親グループの支援ネットワークができたなら、それをも含んでいくことも視野にいったらよいのである。“inclusive”(包括的)なハバの姿勢は、「皆を含めて」いく。そうしたなかで、ステイヴンの論考で指摘されたような排他的に働く分類と枠組を破壊して、同時にまた適当な関係が構築されていくのではなかろうか。

註

- (1) オードリー・コバヤシ (Kobayashi, Audery) 博士はクイーンズ大学〔オタワ〕地理学部教授である。「ニューカナディアン」は Kobayashi, Audery, *The New Canadian*, Vol.63, No19. Thursday, May 6, 1991. J12.
- (2) 綾部は、「エスニック・グループ」を民族集団とし、「国民国家の枠組みのなかで、同種の集団との相互行為的状況下にありながら、なお、固有の伝統文化と我々意識を共有している人々による集団」(1993、P13)としている。「エスニック・グループ」という概念は動的であるとし、「その性格やアイデンティティ、つまり民族集団の在り様の総体」を指して「エスニシティ」と定義している。
- (3) 佐藤は日系カナダ人たちをエスニック集団(グループ)としたうえで、「エスニシティ」を「エスニック集団の性質、エスニック集団としての特質を帯びている状態と定義している。また、「個人が自らをそのエスニック集団の成員によって共有される同類意識」をエスニック・アイデンティティと定義している。
- (4) 官約移民制度は、1885年に日本とハワイ王国とで締結された条約に則り、数年間の契約労働を目的に日本人労働の渡航を斡旋していたものである。1960年代に日本の経済が復興すると、このような組織的移住は消滅に向かった。
- (5) Victoria Heritage Language School; ビクトリアヘリテッジ日本語学校は、幼稚園(4歳児)クラスから高校生(17歳)のクラスまで、毎週金曜日に1時間半の授業が設けられている。生徒数は100人を超える。
- (6) タマガワの自伝とは以下のものを指している。

Tamagawa, Kathleen “Holy Prayers in a Horse’s Ear: A Japanese American Memoir” New Brunswick, N.J. Rutgers University Press, 2008.

“Ethnicity and Inequality in Hawai’i” Temple University Press, 2008

Spickard, Paul R. ‘What must I be? Asian American and the question of multiethnic Identity’ “Asian American Studies: A Reader” e.d. By Min Song Rutgers University Press 2004

Taniguchi, Angela S. and Heidenreich, Linda “Re-mix: Rethinking of the Use of ‘HAPA’ in Mixedrace Asian/Pacific Islander American Community Organizing” *McNair Journal*, Washington State University 2005

(参考文献)

- 綾部恒雄 『現代世界とエスニシティ』 弘文堂、1993
飯野正子 『日系人の歴史』 東京大学出版、1997年
辻 信一 『日系カナダ人 REDRESSING THE PAST』、晶文社、1990
山田千香子 『カナダ日系社会人の文化変容 —「海を渡った日本の村」三世代の変遷』、御茶の水書房、2000
山田千香子 「バンクーバーにおける日系移民の活動と連帯—「新移民」を中心として—」『長崎県立大学論集』第35巻第3号、長崎県立大学、2001
コバヤシ、オードリー 「ジェンダー克服としての海外移住—カナダにおける近年の日本人移民女性の動向」『日系人とグローバリゼーション』(P312-336)、レイン・リョウ・ヒラバヤシ他編 人文書院、2006
佐藤純子 「日系社会におけるエスニック・アイデンティティとエスニック・シンボル—カナダ、バンクーバーを事例として—」『お茶の水地理』、お茶の水女子大学 1997
下茂英輔 「ポストリドレス期の「日系コミュニティ」と日本人移住者：西部カナダにおける移住者の文化帰属感を中心に」『移民研究 (6)』 琉球大学 2010
新保 満 「日系カナダ人社会の変動—歴史・現状・展望—」『カナダ研究年報』第2号、日本カナダ学会 1980
ステイーヴン、マサミ・ロップ 「マイノリティーとマジョリティー—せめぎあい—バレーとアメリカ合衆国における日系人の例—」『日系人とグローバリゼーション』(P417-439)、レイン・リョウ・ヒラバヤシ他編 人文書院、2006
椿真智子 「多文化社会カナダにおける日系社会の変容と文化継承—Ethnic 文化は存続するか—」『東京学芸大学紀要』東京学芸大学、1998
松谷実のり 「現地採用移住の社会学的研究序説：グローバル化時代の多様な移住経験」『京都社会学年報』 京都大学、2014

Bernstein, Mary and Cruz, Marcie De la “What are You?” Explaining Identity as a Goal of the Multiracial Hapa Movement’ “Social Problems” Vol.56, No.4 Oxford University Press 2009

Okamura, Jonathan Y.